

化乳房などのホルモン症候群を呈し、ホルモン定量では尿中カテコラミン排泄量のみが著明に増加したきわめて稀な症例を経験した。腫瘍摘出術を行い症状は改善し、カテコラミン排泄量も正常化した。

14. 気管支・肺カルチノイド5症例の検討

大分県立病院がんセンター
胸部外科 君野孝二, 葉玉哲生
南 寛行, 一万田充俊
辻 博治

同 病理 辻 浩一
Grimelius染色にて、気管支カルチノイドと診断された5症例について、臨床的特徴を述べると共に、組織学的に、気管支鏡下生検、経皮的肺生検、細胞診、それに摘出標本切片での検索を行い、その特徴を検討した。

15. Occult lung cancerの1例

宮崎医科大学第2外科
和氣典雄
71才男性で、何ら臨床症状を呈さず気管支ファイバースコープ下の擦過細胞診で、扁平上皮癌の診断を得、外科的に治癒せしめた。Occult lung cancer(表層浸潤型肺門部早期肺癌)を経験したので、若干の文献的考察を加えて報告した。

16. 比較的末梢に発生し興味ある進展を示した腺様嚢胞癌の1例

国立大分病院呼吸器科
桑原哲郎, 福島 純, 宮崎泰弘
甲斐隆義

我々は、左B⁹亜区或支以下に発生したと思われるadenoid cystic carcinomaの1手術例を経験した。切除標本よりその進展発育に対し考察を加え報告した。

17. Intravascular and Sclerosing Bronchiolo-alveolar Tumor(IVSBAT)の1例

国療沖縄病院外科 源河圭一郎
長嶺信夫, 石川清司, 国吉真行
宮里恵三郎

那覇市立病院病理 野原雄介
患者は48歳女で昭和53年8月、集検で胸部X線像上、両側肺野に多数の大豆大の結節状陰影を指摘され、原発巣不明の転移性肺腫瘍を疑い、開胸肺生検を実施。病理組織学的に標題の如き診断名がつく。本邦初例と考える。

18. 肺小細胞癌の治療

国立病院九州がんセンター
大田満夫, 原 信之, 田中康一
一瀬幸人, 八板英道, 野下貞寿
宮崎一博, 安元公正

肺小細胞癌67例のうち14例に切除と治療を行ない、44%の5年生存率を得た。I, II期例なら切除の適応がある。非手術の55例に放射線照射とVEMT治療がされた。有効率(C.R.+P.R.)は65.5%で、病期の早期程有効率が高かった。有効例の生存率は無効例より有意に良かった。

19. 大細胞未分化癌48例の臨床的及び病理学的検討

国療南熊本病院 平岡武典, 他
大細胞癌はmultipotentialityが高く組織学的に多彩な像を呈することより、発生頻度も10%弱から40%強と大きな差がある。この発生頻度の差は大細胞癌のなかで他組織型への分化傾向を持つ部分像をいかに解釈し診断するかである。今回、大細胞癌と組織学的に診断がついた43例を6つの亜型に分類し、他組織型への部分像の取扱いについて検討した。その結果、他組織型へ部分的に分化する傾向をもつ大細胞癌は、その分化した基本型の肺癌の発生部位、浸潤様式および予後によく似た。X線病型では肺野腫瘍型が約80%を占

め、無気肺例はなかった。気管支鏡所見では不可視例が多く、可視出来た腫瘍でも表面は平滑で壊死は少なかった。気管支造影所見は病巣気管支の狭窄、尖型閉塞、隣接気管支の圧排偏位および虫蝕い像が約65%を占めた。

20. 原発性肺癌：脳転移の臨床的検討—自験例47例について—

熊本大学第1内科

千場 博, 上妻和夫, 樋口定信
青木隆幸, 岳中耐夫, 島津和泰
徳永勝正, 杉本峯晴, 福田安嗣
安藤正幸, 徳臣晴比古

過去11年間に入院治療を行った原発性肺癌は349例に及んでいる。この内脳転移を認めた47例(13.5%)について報告した。sq.c.c.は11例(8.4%)、adeno21例(15.2%)、small c.c.6例(16.7%)、large c.c.7例(21.9%)を示し、未分化癌、腺癌、扁平上皮癌の順で高率であった。

21. 当院における肺癌剖検66例の検討

大分県立病院がんセンター
胸部外科 葉玉哲生, 南 寛行
君野孝二, 辻 博治
同 第3内科

山崎 力, 末友祥正, 岸川正純
同 病理 辻 浩一, 横山繁生
66例の剖検例において組織型別遠隔転移の状況、リンパ節転移の範囲、死因につき検討した。直接死因は癌死でなく、肺感染症、BLM肺臓炎、放射線肺臓炎が多いことは免疫能の低下した末期肺癌の治療上反省点である。

22. 当院における肺癌剖検例79例の検討

長崎市立市民病院第2内科
岡三喜男, 船津 龍
仲宗根恵俊, 池辺 璋
中野正心

九州支部

長崎大学第2病理 行徳 豊

昭和50年1月より昭和56年5月までの原発性肺癌剖検例は79例、剖検率70%、死因は腫瘍死80%、合併症死20%、転移臓器は肺、肝、副腎、骨の順で高齢者の扁平上皮癌、大・小細胞癌で転移率が低かった。又、肝転移無症例のI・IV期での生存率が良かった。

23. 肺癌におけるAdriamycin気管支動脈内注入法—主として縮小効果について—

久留米大学第1内科 林 市朗
安倍俊男, 林 俊二, 光武良幸
市川弥生, 田中二三郎
市川洋一郎, 加地正郎

原発性肺癌に対する気管支動脈内制癌剤注入法(以下BAI)は広く行なわれており、その有用性も高い。今回、私達はアドリアマイシン投与によるBAI効果を胸部X線上の腫瘍陰影の長径とそれに直角に交わる最大径の積により、BAI前後で比較した。又、BAIと静脈内投与における血中濃度を測定した。血管増生度についてはhypervascular typeに高い有効率を認め、又組織型別では小細胞未分化癌と扁平上皮癌に効果例が多かった。42例の原発性肺癌で有効であったものは48%に達し、これは放射線療法で2,000~3,000Rに相当するものであり副作用の面から考えてもBAIはかなり有用な治療法である。又BAIの血中濃度より組織内吸着性が推察され少なくとも3~4週間隔ではアドリアマイシンの蓄積は起こらないものと思われた。

24. 癌性胸膜炎に対するCarboquone療法を検討

国療大牟田病院 徳永尚登
藤野和馬, 平井 裕, 黒岩 達
半井一郎, 石橋凡雄, 篠田 厚

今回我々は、癌性胸膜炎に対してCarboquone, Cylosideの全身投与のみによる治療を行った。その結果胸水の消失及び減少を認めたものは10例中6例あり、従来の抗癌剤の全身化学療法単独による成績に比べ良好であった。

25. Bestatinのヒト末梢血monocyteにおよぼす影響について

熊本大学第1内科
樋口定信, 安藤正幸, 福田安嗣
堀尾 直, 徳臣晴比古

Bestatinのヒト末梢血monocyteにおよぼす影響をNBT還元能を示標にして検討した。その結果NBT還元能を上昇させる為には、Bestatinの血中濃度を100 γ /ml以上にする必要があると考えられた。

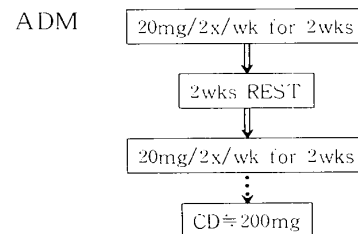
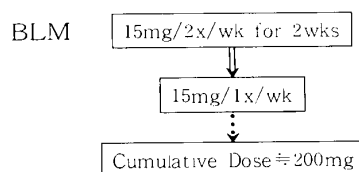
26. 肺扁平上皮癌に対するBA(BLM+ADM)療法とBAA(BLM+ADM+ACNU)療法

琉球大学医学部検査部
外間政哲
同 第1内科 金城勇徳
国立沖縄病院内科 久場睦夫
〔目的〕肺扁平上皮癌に対する、BA(BLM+ADM)療法、さらにBAA(BLM+ADM+ACNU)療法というわれわれ独自の併用方式による臨床成績について報告する。

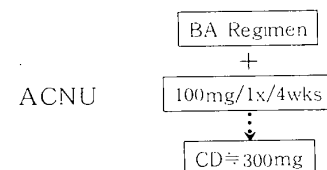
〔対象症例〕組織学的に扁平上皮癌と診断され、かつIII期以上の手術不能と判定された未治療症例である。BA療法12例、BAA療法3例である。

〔方法と成績〕

1) BA Regimen



2) BAA Regimen



BA療法を施行した12例中5例に有効であった。その中で最長生存期間は60週で、5例のMSTは38.6週であった。

BAA療法を施行した3例中1例は高度のSVC症候群を伴っていたが腫瘍陰影とともに急速に消退し、BA療法に優る著効を示した。

副作用については脱毛は殆んど必発で、心肺毒性は皆無であったが、白血球減少がとくにBAA療法で顕著であった。ただし可逆性であった。

27. 肺癌に対するLimited operationの臨床的検討

宮崎医科大学第2外科

米澤 勤

肺癌に対してLimited operationを施行した8例と、stage Iまでの症例でLobectomyを施行した11例とを対比検討した結果、その予後において、追跡期間は短い、現時点では両者の間に差はないと考えられ、肺機能温存の面からも、十分に適応症例を含め、術後合併療法を行えば、Limited operationも、根治性を期待できる手術法として考慮したい術式である。

28. 肺癌に対する気管支形成術症例の検討—とくに適応と